〔事案 27-19〕 転換契約無効等請求

・平成 28 年 3 月 20 日 和解成立

<事案の概要>

契約者に無断で契約転換がなされ、かつ、説明が適切になされなかったことや、被保険者の同意を得ていなかったことなどを理由に、転換を無効とし、転換以後の既払込保険料の返還等を求めて申立てのあったもの。

<申立人の主張>

昭和 61 年 9 月に自分の配偶者を被保険者として契約した終身保険（契約①）について、平成 14 年 9 月に利率変動型積立終身保険に契約転換し、その後、同 18 年 6 月および同 23 年 3 月に保障内容を見直した。また、平成 2 年 4 月に自分の子を被保険者として契約した終身保険（契約②）について、同 11 年 6 月に別の終身保険に契約転換し、同 14 年 9 月に利率変動積立型終身保険に契約転換し、同 18 年 6 月に保障内容を見直した。しかし、以下の理由により、各契約を当初の契約内容に戻し、各契約転換以後の既払込保険料を返還してほしい。

1. 契約①について

- (1)貯蓄性の高い終身保険を消滅させ、合理性に欠ける掛け捨て型に転換させた。
- (2)募集人は、事前に設計書を交付せず、被保険者に対し、ごく短時間で説明を行い、予定利率が下がることや掛け捨てであることなどの説明をしなかった。また、契約者に対し、積立金を取り崩すことなどの説明をしなかった。
- (3)平成 14 年は契約者が入院中であり、契約者に無面接で、被保険者の手続きにより、契約を転換させた。
- (4)募集人は、被保険者が「掛け捨てか」と質問したところ、「違う」と虚偽の説明をした。
- (5)契約者の意向に反した保険に転換させた。

2. 契約②について

- (1)貯蓄性の高い終身保険を消滅させ、合理性に欠ける掛け捨て型に転換させた。
- (2)契約転換であることや転換以外の方法、不利益部分に関する説明がなかった。
- (3)被保険者に無面接かつ同意を得ず、配偶者の代筆により、契約させた。平成 14 年は契約者が入院中であり、本人に無面接で、被保険者の手続きにより、契約を転換させた。
- (4)募集人は、被保険者が「掛け捨てか」と質問したところ、「違う」と述べ、「積立金はなくなっていくのか」との質問に対し、「なくなる」と虚偽の説明をした。
- (5)契約者の意向に反した保険に転換させた。

<保険会社の主張>

以下の理由により、申立人の請求に応じることはできない。

1. 契約①および契約②について

- (1)いずれの契約転換も、被保険者らの保障ニーズに即したものである。
- (2)申立人の配偶者は、申立人一家の保険契約について手続きを一任されている。また、平成 18 年および 23 年の契約転換は申立人本人が手続きを行うなど、本人も追認している。

2. 契約②について

- (1)被保険者同意は、被保険者または契約者のいずれかに対してなされればよく、口頭や黙示でもよいとされ、契約後に同意があれば、成立時に遡って有効となる。

<裁定の概要>

1. 裁定手続

裁定審査会は、当事者から提出された書面にもとづく審理の他、各契約転換時の状況等を把握するため、申立人、申立人の配偶者および子ならびに募集人に対して事情聴取を行った。

2. 裁定結果

上記手続の結果、本件に関する判断を行うに足る心証を得ることはできなかったものの、以下および紛争の早期解決の観点から、本件は和解により解決を図るのが相当であると判断し、業務規程第 34 条 1 項にもとづき、和解案を当事者双方に提示し、その受諾を勧告したところ、同意が得られたので、和解契約書の締結をもって解決した。

(1) 保険会社が、事前の交渉段階で、和解提案を行っている。

(2) 保険会社の募集人の募集行為には、以下の問題点があると思われる。

- ① 募集人の事情聴取において、少なくとも、(他保険を含む) 申立人の契約については、申立人の配偶者が窓口であると理解し、契約者や被保険者の意思を直接確認する必要性についての認識が低かった。
- ② 募集人は、平成 14 年当時、申立人が入院していたとは聞いていないと述べているが、申立人が自宅にいると認識していたのであれば、直接の意思確認も容易であったにもかかわらず、配偶者の署名のみで契約を成立させている。
- ③ 平成 11 年当時、被保険者である申立人の子が申立人と同居していると聞いていたと述べているが、募集人は、告知書という重要な書類についても、申立人の子の意思を確認した記憶がはっきりしない。